書などの多くの証言も引用、作品の受容や時代背景などにも言及された詳細かつ説得力のある評伝である。交響曲に加え、ヴァイオリン協奏曲や『タピオラ』などの作品も取りあげられ、例えば『フィンランディア』にカレワラの旋律の拍節と同じ5拍子が使われているなど、詳しく解説、シベリウスの創作に対する考え方や彼の作曲様式の変遷を明快に知ることができるだろう。また作品表や主要人物の説明を付した索引も充実している。フィンランド人として、自己の音楽を生涯探究したシベリウスと彼の音楽の理解に欠かせない1冊である。

（菅野泰彦）

木琴デイズ

平岡養一「天衣無縫の音楽人生」

通崎睦美 著　講談社 刊

本体1900円＋税

『木琴デイズ』はかつて一世を風靡した木琴のヴィルトゥオーゾ・平岡養一の音楽にかけた一途な生涯を、同じ木琴の名手・通崎睦美が共感を覚えつつ辿ったノン・フィクション。

5歳からマリンバを習っていた通崎は10歳の時、70歳の平岡と木琴で共演するという幸運に恵まれた。その後、京都市立芸大大学院を出てマリンバ奏者として活躍していた通崎に、平岡の初演した紙恭輔の「木琴協奏曲」を平岡の愛器で、井上道義指揮の東京フィルの定期で演奏するという幸運が飛び込んできた。さらにこれが縁となり通崎に平岡愛用の木琴が譲られたのである。これがきっかけとなって通崎は木琴の音色にあらためて魅せられ、木琴奏者として平岡の愛奏した曲の演奏はもちろん、平岡の音楽にかけた生涯を辿るようになった。

独学で木琴を学んだ平岡は、慶應義塾大学を卒業すると23歳で木琴王国といわれたアメリカに渡った。そして苦労の末、NBCラジオで専属としてレビュラー番組を持てるようになった。それは毎朝15分間放送される平岡の木琴の生演奏番組で、第二次世界大戦が勃発した1941年12月7日まで、実に10年9ヶ月も続いた。

その後、平岡は家族と共に日米交換船で日本に送還されたが、失意に沈むことなく音楽活動を再開。やがて国民的音楽家といわれるぐらい日本中でもてはやされた。戦後、家族と再渡米し、日本とも往復しながら両国で活発に活躍した。この頃、後に有名になる「日本狂詩曲」をハンス・スピアレクの協力を得て編曲した。これは貴志康一の「竹取物語」など4曲をもとにした日本情緒豊かな協奏曲であった。

今の若い人にとっては平岡養一は、馴染みの薄い過去の音楽家かもしれない。しかし平岡が木琴の普及につとめ、木琴をクラシック音楽の領域にまで高めた功績を忘れてはならない。そんな平岡の音楽にかけた天衣無縫の生涯を、通崎は充実した人物伝としてまとめた。もちろん音源や資料の収集は徹底的で万全を期し、戦後流行し始めたマリンバやライバルだった朝吹英一にも目配りを忘れていない。

（日下徳一）

♪